

【原著】

助産学実習における学生の「産婦の正常経過を促進するケア」 実施状況と今後の課題

高塚麻由、高島葉子、菊地美帆

新潟県立看護大学 臨床看護学領域 助産学

(受付：平成 24 年 1 月 11 日)

(受理：平成 24 年 1 月 20 日)

要 旨

助産学実習における学生の「産婦の正常経過を促進するケア」にかかわる助産技術の学習状況を、過去 50 事例の実習記録より分析し今後の教育課題を検討した。その結果、学生は産婦の正常経過を促進するケアとして、体位の工夫、温罨法、産痛部位のマッサージ等 17 項目を実施し、中でも多かったケアは呼吸法であった。また、正常経過を促進するケアにかかわる技術習得度の自己評価は分娩介助例数 8 例目から上昇した。しかし、学生のかかわった分娩介助 50 事例に対して実施したケアは多いとはいえず、これは、産婦の受け持ち開始時期の差異、記載もれなどいくつかの要因によるものと考えられた。過去の実習記録から抽出する限界はあるものの産婦の正常経過を促進するケアを学習することに向け、学生の分娩介助実習をとりまく状況に応じた講義、演習、実習の工夫の方向性が示唆された。

キーワード：助産学実習、分娩介助、助産師学生、産婦ケア、正常分娩

緒 言

学士課程で助産師教育を受ける学生の背景は、生活体験の乏しさ、臨地実習での看護技術実践機会の減少、過密なカリキュラムにより主体的に思考して学ぶ余裕のなさ¹⁾など看護学生で指摘されていることと同様といえる。特に多くの時間を費やす分娩第 1 期のケアは分娩進行に影響をおよぼすものであるにもかかわらず、母性看護学実習では見学の機会も減少している。助産学を履修する学生にとって臨地実習で看護技術を実践することや分娩見学の機会減少は、“連続し、複雑な技術から成り立つ分娩介助技術”を学ぶにあたっての準備状況に大きな影響を与えている。助産師の卒業時到達目標には、正常分娩の診断と介助が「少しの助言で自立してできる」²⁾とされており、助産学実習において産婦の正常経過を促進するケアを体験的に学習することは重要な課題である。そこで、助産学実習における学生の「産婦の正常経過を

促進するケア」実施状況と今後の課題を検討することとした。

助産学実習の概要

N 看護大学では 7 月から 8 月の 2 か月間、2 か所の実習施設において分娩介助実習を実施している。指導体制は、臨床では 5 年目以上の助産師が指導にあたり、教員は日中必ず、そして夜間帯は必要時実習施設に出向き学生の指導にあたっている。産婦へは、妊婦健診時に説明し分娩開始前までに同意を得て実習に臨んでいる。学生が産婦を受け持つ時期は分娩第 1 期からとし、少なくとも分娩までの 2 時間は受け持つことができるよう臨床と調整している。なお、保健師助産師看護師養成所指定規則の規定である「分娩介助 10 回程度」に関して、N 看護大学では毎年達成している。

研究方法

1 調査期間

平成21年9月から平成22年9月

2 調査対象

N看護大学において過去2年間で助産学履修学生が分娩介助した50事例の実習記録を対象とした。また、実習記録のうち、パルトグラム(分娩経過図)、および分娩第1期の技術チェックリストの自己評価を分析対象とした。実習記録のうちパルトグラムを対象とした理由は、助産計画を含む一連の助産過程を学生は実習後振り返りつつ記載する。そのため実習において実際に実施したケアが分かりづらくなることから、実習と同時に記載されていくパルトグラムとした。

3 調査内容

学生の記載したパルトグラムを丹念に読み、記載されているケア内容から、「産婦の正常経過を促進するケア」に該当する箇所を抽出・集計した。さらに分娩第1期の技術チェックリストにある「産婦の正常経過を促進するケア」の項目ごとにこれらを整理した。技術チェックリストは4項目〈産婦が望む方法で適切な産痛緩和を実施できる〉〈分娩進行を促すケアができる〉〈体力温存のためのケアができる〉〈物的・人的な環境の調整ができる〉である。これは3段階の自己評価点「1：指導を受けながら実施できる 2：助言があれば実施できる 3：1人でできる」からなり、学生は次回分娩介助の課題を明確にするために技術チェックリストを用いて振り返りを実施している(表1)。学生の自己評価に基づき、50事例を分娩介助1例目から10例目まで平均点を算出しその推移をみた。

4 倫理的配慮

助産学履修修了生に対して研究の趣旨と実習記録をデータとすることおよび実習記録より転記したデータの使用に関しては、利用目的・厳重なデータ管理と研究終了後の廃棄について説明し承諾を得た。また、個々の産婦と修了生お

よび施設の特定がなされないよう配慮した。

結果

1 パルトグラムに記載された「産婦の正常経過を促進するケア」内容

パルトグラムに記載のあった「産婦の正常経過を促進するケア」には、呼吸法、体位の工夫、温罨法、産痛部位のマッサージ等17項目の記載がみられた。記載回数の多かったケアは、「呼吸法を行う」「水分や食物の摂取を促す」「体位を工夫する」「排尿を促す」「休息を促す」「歩行を促す」「産痛部位をマッサージする」であった(表2)。さらに、分娩第1期の技術チェッ

表1 技術チェックリスト項目と評価点

<input type="checkbox"/> 産痛緩和ケア：
産婦が望む方法で適切な産痛緩和を実施できる
<input type="checkbox"/> 分娩進行を促すケアができる
<input type="checkbox"/> 体力温存のためのケアができる
<input type="checkbox"/> 環境整備：物的・人的な環境の調整ができる
＜評価点＞
1：指導を受けながら実施できる
2：助言があれば実施できる
3：1人でできる

表2 パルトグラムの記載内容

ケア内容	記載回数
呼吸法を行う	35
水分や食物の摂取を促す	18
体位を工夫する	16
排尿を促す	11
休息を促す	10
歩行を促す	9
産痛部位をマッサージする	7
声かけや産婦を認める	6
シャワー浴を勧める	6
産婦の好みで過ごす、普通に過ごす、リラックス	5
三陰交を刺激する	5
夫のサポートを得る	4
温罨法を行う	4
環境を整える	4
足浴する	3
そばに付き添う	1
説明する	1

クリスト4項目に沿って分類し示した(表3)。これらの項目は技術評価の上で別項目となっているものの、互いに関連しあいながら分娩の促進に働くものであり、項目間でのケア数の多少は問うものではない。したがって、正常経過を促進するケアとしては、概ね考えられるケアを実施していたとみることができる。

表3 技術チェックリスト項目とケア内容

技術チェックリスト項目とケア内容	
産婦が望む方法で適切な産痛緩和を実施できる	呼吸法を行う、産痛部位をマッサージする 声かけや産婦を認める、シャワー浴を勧める 三陰交を刺激する、温罨法を行う 足浴する、説明する
分娩進行を促すケアができる	体位を工夫する、排尿を促す、歩行を促す
体力温存のためのケアができる	水分や食物の摂取を促す
物的・人的な環境の調整ができる	休息を促す、夫のサポートを得る 産婦の好みで過ごす 普通に過ごす、リラックス 環境を整える、そばに付き添う

2 技術チェックリスト自己評価の推移

分娩第1期における技術チェックリストのうち、「産婦の正常経過を促進するケア」にかかわる4項目〈産婦が望む方法で適切な産痛緩和を実施できる〉、〈分娩進行を促すケアができる〉、〈体力温存のためのケアができる〉、〈物的・人的な環境の調整ができる〉の評価点を分娩介助例数ごとに平均値を算出し、その推移をみた(図1)。7例目に一旦評価点は低下するものの、全体的には8例目より評価点は高くなるといえる。

考 察

本研究では、学生の「産婦の正常経過を促進するケア」の実施と自己評価から学習状況を分析した。卒業時到達度レベルを考慮した学びの積み重ねについて今後の課題を踏まえ考察する。

助産師にとり産婦が正常経過をたどることの意味は、助産診断に基づく助産ケアの範囲に産婦がいることであり、よりリスクの低い分娩経過をたどる産婦ということである。したがって助産を学ぶ学生が正常経過を促進するケアを学ぶことの意味は、産婦の心身のエネルギーの消耗を最小限にし、出産の生理的な機序を円滑に

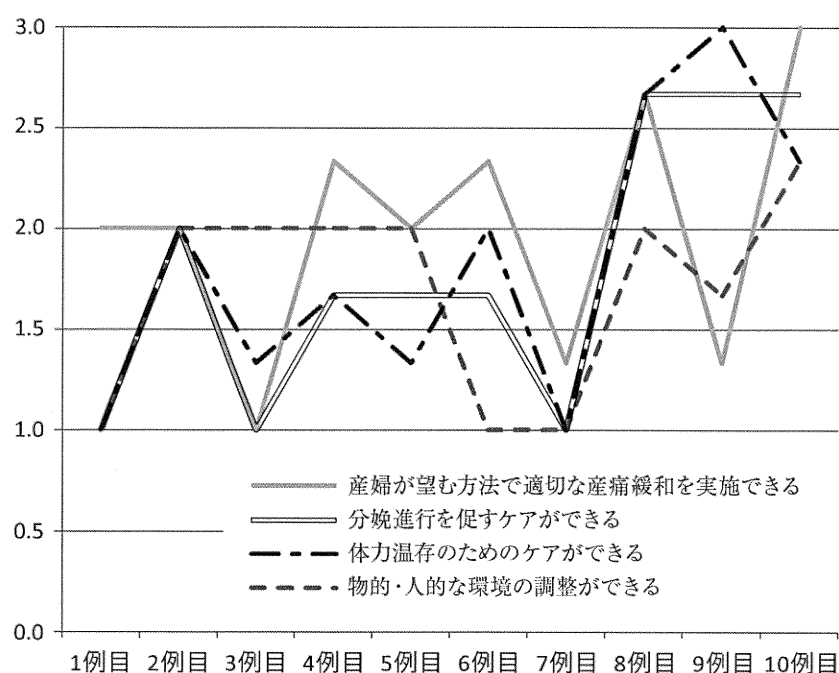


図1 技術チェックリストの自己評価

進め産婦自身の産む力を最大限に引き出す助産の役割³⁾を学ぶことである。それは産婦にとり、自分自身の産む力を最大限に引き出し満足な出産体験につながる重要な課題でもある。今回、正常経過を促進するケアとして抽出された17項目は分娩第1期から第2期における正常経過を促進するケア³⁾であり学生が講義で学んでいるケア内容であった。呼吸法、水分・食物摂取を促すなど学生が産婦のニーズを捉えやすく実施につながりやすいケア、またシャワー浴や足浴など分娩期に1度実施するかしないかといったケアの性質の違いはあるものの、全体を通し記載されたケア回数は分娩介助50事例に対して多いとはいえない。4つの技術項目からみた場合、分娩進行の促進および体力温存のためのケアはおおむね実施していたといえるが、呼吸法を除く産痛緩和および環境整備は少ない。この理由には、産婦の受け持ち開始時期やニーズの差異、刻々と変化する産婦へのケアと同時に記録する限界、またこれまでの臨地実習で看護技術実践機会の少なかったことから実践につながらない等があるものと推測される。産婦の家族が常時付き添う近年の出産状況は、学生の産婦へのかかわりにくさとなり、産婦の側で分娩3要素の観察を十分行えないことも実施につながらない要因と考えられる。分娩介助1例目は演習で得た成果が発揮できず、4例目までは基本的技術を身につける時期⁴⁾という技術習得過程やケアの性質を踏まえ、講義から実習までの一連の学習過程の中で実施につながる演習をさらに工夫することが必要といえる。

学士課程で助産学を選択する学生は、産婦の身体状況を捉えること、そして分娩進行を促進するケアを実践し産婦に寄り添うことを大切にすると⁵⁾という学びの構造をもつ。また分娩介助技術の習得は例数ごとに、始動期、準備期、移行期を経て7～9例目には到達期を迎えるという⁴⁾。このことから学生は、刻々と変化する産婦の変化を1例ごとと捉えながら促進のためのケアを実施し学びを積み重ね、8例目を迎える頃「一人でできる」評価点に近づくという習得過程をたどったのだと考えられた。したがっ

て前述した受け持ち開始時期や産婦のニーズの差異など学生の関与しない要因も踏まえ、8例目に至るまでにどのような経験を学び積み重ねてゆくかが重要となってくる。このため、今後の課題に「分娩3要素を中心とした助産過程および産婦の状況にあったケアの実施とその評価」「実施したケアの記載と分娩介助の振り返り」「講義および身体をとおした事前演習での意識づけ」の3点をあげる。分娩3要素を中心とした助産過程は、助産診断から実施したケアを評価するという一連の助産過程をたどることであり、新人助産師にとっても学生時代に学ぶべき内容として重要なものである⁶⁾。分娩3要素に基づく助産過程を展開するよう努めることは、産婦個々に応じた正常経過促進ケアを導き出し実施することにつながる。分娩介助の振り返りは、体験が印象づけられ今後の目標が明確になる⁷⁾ことであり、実施したケアの記載と正常経過を促進するケアの視点を入れた振り返りにより卒業時に到達すべきレベルへとつながっていくことが期待できる。また講義での意識づけに加え、生活体験の乏しさと臨地実習での看護技術実践の機会減少といった学生の背景を踏まえ足浴や温罨法など学生自身の身体をとおした演習を行うことも準備のひとつとなるだろう。これらの工夫により分娩介助技術を卒業時到達レベルに近づく実習とすることができると期待できる。

結 語

分娩介助実習における学生の「産婦の正常経過を促進するケア」の学習状況についてこれまでの実習状況から考察してきた。卒業時到達目標にあげられている産婦の正常経過を促進するケアは母児の安全そして満足な出産を支援する助産師にとって中核となる課題である。今回の結果を踏まえ、学生の学びを促進するために分娩介助実習をとりまく状況に応じた講義、演習、実習の工夫の方向性が示唆された。

研究の限界

バルトグラムは実習中に産婦ケアと同時に記載するため、記載漏れのあることが推測された。このため記載された回数及び内容に限界が生じたと思われる。今後は実施した助産過程を評価する側面からも記載を促すとともに助産診断に基づくケア実施の学習をすすめていきたい。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、こころよく実習記録を提供してくださいました助産学履修修了生に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 平成23年
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>
- 2) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会 第一次報告 平成22年
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001316e.pdf>
- 3) 我部山キヨ子、武谷雄二：助産診断・技術学Ⅱ [2] 分娩期・産褥期. 医学書院 東京 PP152-183 2008
- 4) 石村美由紀、古田祐子、他：分娩介助技術の習得過程—本学での分娩介助技術評価調査より—. 福岡県立大学看護研究紀要 **7(1)**: 18-28 2009
- 5) 松井弘美、永山くに子、他：学士課程で助産を選択する学生の分娩介助10例における学び～分娩介助実習体験を中心に～. 富山大学看護学会誌 **10(1)**: 37-47 2011
- 6) 中島久美子、國清恭子、他：新人助産師の視座から捉えた分娩介助・継続事例実習指導の課題. 日本助産学会誌 **23(1)**: 5-15 2009
- 7) 菱沼由梨：臨床指導者の視座による分娩介助の「振り返り」という学びの意味. 母性衛生 **50(4)**: 637-645 2010

連絡先：高塚麻由
 新潟県立看護大学 臨床看護学領域 助産学
 943-0147 新潟県上越市新南町 240 番地
 Tel&Fax: 025-526-3112
 e-mail: takamayu@niigata-cn.ac.jp

Current situation and future problems of training midwifery students in pregnancy care

Mayu TAKATSUKA, Yoko TAKASHIMA, Miho KIKUCHI

Department of Midwifery, Faculty of Clinical Practical Nursing, Niigata College of Nursing

Summary

Teaching conditions in “care for promoting the normal progress of pregnancy” for during midwifery training were analyzed by examining training records of the past 50 deliveries. Based on this, future problems were identified. Students conducted 17 items of care including posture improvements, heat compresses, and massaging painful positions, among others, with breathing exercises the most often conducted care item. Self-evaluation of the degree of mastery in these care skills indicated that the skills were higher after the eighth delivery assistance. However, only a few care activities were actually conducted in the 50 cases. The reason for this could be differences in taking charge of pregnant women, and omissions, among others. The above results suggested the future need to improve lectures, exercises, and training, based on the conditions of available midwifery training for pregnancy care. The findings of this study are however subject to limitations in analyzing past training records.

(Med Biol **156**: 122-127 2012)

Key words: midwifery training, delivery assistance, midwifery students, care for pregnant women, normal delivery

Correspondence address: Mayu TAKATSUKA

Department of Midwifery, Faculty of Clinical Practical Nursing, Niigata College of Nursing

240 Shinnan-cho, Joetsu city, Niigata, 943-0147, Japan

tel & fax: +81-25-526-3112

e-mail: takamayu@niigata-cn.ac.jp